次（に）、佐渡の州を生（み）ます。建日別（たけひわけ）と云ふ。

次（に）、大日本豊秋津州をうみます。天御虚空豊秋津根別（あめのみそらとよあきつねわけ）と云（い）ふ。

すべて、是を、大八州と云也。此外、あまたの嶋を生（うみ）給。後に海山（うみやま）の神、木のおや、草のおやまで悉（ことごとく）うみましてけり。

何（いづ）れも神にませば、生（うみ）給へる神の州（しま）をも、山をもつくり給へるか。

はた、州山（しまやま）を生給（うみたまふ）に、神のあらはれましけるか、神世（かみよ）のわざなれば、まことに難測（はかりがたし）。

二（ふたはしらの）神、又、はからひてのたまはく「我、すでに、大八州の国、および、山川草木をうめり。いかでか、あめの下のきみたるものを、うまざらむや」とて、まづ、日神を生（み）ます。

此みこ、ひかりうるはしくして、国内（くぬち）にてりとほる。二神、よろこびて、天（あめ）におくりあげて、天上の事をさづけ給。

此時、天地、あひさること、とほからず。天のみはしらをもて、あげ給。これを、大日霎の尊と申（す）

〈霎（れいの）字は、霊と通ずべきなり。陰気を霎（れい）と云とも、云へり。女神にましませば、自（おのづか）ら相叶（あひかなふ）にや〉。

又、天照太神とも申（まをす）。女神にてまします也。

次（に）、月神を生（み）ます。其光、日につげり。天（あめ）にのぼせて夜（よる）の政（まつりごと）をさづけ給。

次に、蛭子（ひるこ）を生みます。みとせになるまで脚（あし）たたず。天（あめ）の磐樟（いはくす）船にのせて風のまま、はなちすつ。

次（に）、素戔烏尊を生（み）ます。いさみ、たけく、不忍（いぶり）にして、父母（かぞいろ）の御心にかなはず。

「根（ね）の国にいね。」との給ふ。

この三柱（みはしら）は男神（をがみ）にてまします。よりて一女三男（いちによ、さんなん）と申也。

すべてあらゆる神、みな、二神の所生（しよしやう）にましませど、国の主（あるじ）たるべしとて生（み）給

しかば、ことさらに、此四（よはしらの）神を申伝けるにこそ。

其後、火神（ひのかみ）軻倶突智を生（み）ましましし時、陰神（めがみ）やかれて神退（かんさり）給にき。

陽神（をがみ）うらみいかりて、火神を、三段（みきだ）にきる。その三段、おのおの神となる。

血のしたゝりも、そそいで神となれり。経津主（ふつぬし）の神〈斎主（いはひぬし）の神とも申。今の檝取（かとり）の神〉・健甕槌（たけみかづちの）神〈武雷の神とも申。今の鹿嶋の神〉の祖（みおや）也。

陽神、猶、したひて黄泉（よみのくに）までおはしまして、さまざまのちかひありき。

陰神、うらみて「此国の人を一日（ひとひ）に千頭（ちかしら）ころすべし」との給ければ、陽神は「千五百頭（ちいほがしら）を生（む）べし」との給けり。よりて百姓をば天（あめ）の益人（ますひと）とも云ふ。死（しぬ）るものよりも、生ずるものおほき也。

陽神、かへり給て、日向の小戸の河の檍（あはぎ）が原と云所にて、みそぎし給。この時、あまたの神、化生（けしやう）し玉へり。日月（ひつきの）神も、こゝにて生給（うまれたまふ）と云説あり。

伊弉諾尊、神功（かむごと）すでにをはりければ、天上にのぼり、天祖に報命（かへりごと）申て、即（すなはち）、天にとゞまり給けり、とぞ。

或（ある）説に、伊弉諾・伊弉冊は、梵語（ぼんご）なり、伊舎那天（いしやなてん）・伊舎那后（いしやなごう）なりと云（い）ふ。

地神（ちしん）第一代、大日孁（おほひるめの）尊。是を天照太神（あまてらすおほみかみ）と申。又は日神（ひのかみ）とも皇祖（すめみおや）とも申也。

此神の生（うまれ）給こと三（みつ）の説あり。一（ひとつ）には伊弉諾・伊弉冊尊あひ計（はからひ）て、天下（あめのした）の主（あるじ）をうまざらんやとて、先（まづ）、日神をうみ、次に月神（つきのかみ）、次（つぎに）蛭子（ひるこ）、次（つぎに）素戔烏尊を生（うみ）給といへり。

又は、伊弉諾の尊、左（ひだりの）御手に白銅（ますみ）の鏡をとりて大日孁の尊を化生（けしやう）し、右（みぎの）御手にとりて月弓（つきゆみ）の尊を生（み）、御首（みかうべ）をめぐらしてかへりみ給しあひだに、素戔烏尊を生（む）ともいへり。

又、伊弉諾尊、日向の小戸の川にてみそぎし給し時、左の御眼（みめ）をあらひて天照太神を化生し、右の御眼をあらひて月読（つきよみ）の尊を生（しやう）じ、御（み）鼻を洗（あらひ）て素戔烏尊を生（しやう）じ給とも云ふ。

日月（ひつきの）神の御名（みな）も三（みつ）あり、化生の所も三（みつ）あれば、凡慮はかりがたし。